

(別紙 2)

論文審査結果の要旨

氏名 北村英哉

本論文は、社会的認知における情報処理過程にかかわるものである。他者やメッセージなどの社会的刺激を情報処理する際の心的過程について、その処理プロセスを重視するモデルを呈示し、実証実験を行っている。とくに、社会的認知過程において、「手続き的知識」の活性化を取り上げたことにこの論文の独創性がある。これまでの社会的認知研究では、宣言的知識、とりわけ意味ネットワークモデルを理論的基盤にした研究が多くなされてきた。それに対して、本論文では宣言的知識に対置させて手続き的知識を取り上げている。論文の中でも指摘されているように、ネットワークモデルは、記憶表象のモデルとして提案されたものであるが、社会的認知において多く扱われているのは、さらに高次の思考過程に近い判断を産出するプロセスである。社会的判断がどのように形成されるか、そのプロセスをモデル化していくにあたって、手続き的知識の働きに着目したことは、本論文の大きな貢献であり、これから多くの研究者の関心を引き付ける新たな研究分野となっていく可能性の大きいものと評価できる。

第1章では、手続き的知識の一種として「情報処理方略」を取り上げる意義が論考されている。情報処理方略とは、「心的プロセスとして生じる一連の情報処理の仕方」であると定義づけ、ひとつのまとまった手続き的知識として働くものであることを論じている。第2章においては、対人認知方略など情報処理方略の実際とその働きが3つの実験によって実証的に描かれている。例えば人の見方にあたる方略となる「どのような側面を重視するか」という視点が記憶の多寡に影響することが示されている。第3章では、先行課題による情報処理方略の活性化について3つの実験の結果が示され、情報処理方略を事前に活性化させることによって、後続の課題にその方略を適用する可能性が高まることが明らかになっている。これによって、情報処理方略がひとつのまとまった心的メカニズムとして扱い得るような構成概念であることを示している。第4章では、感情状態によって自動的処理方略、コントロール処理方略が活性化されることが4つの実験によって示されている。これは情報処理方略という認知プロセスと感情プロセスとを接合する興味深い知見であり、「感情と認知」という社会的認知分野の一つの先端領域を扱った優れた実証研究である。研究7、8の基をなしている実験論文は、日本グループ・ダイナミクス学会の2002年度の優秀論文賞を受賞するなど、本論文中に含まれている9つの研究はそれぞれ高水準のものと言える。

もっとも、情報処理方略を手続き的知識としていながら、その内容および仕組みが十分に詳細に描かれているわけではない、という問題は残されている。しかし、これは今後の研究によって明らかにされていくべき課題であり、本審査委員会は、本論文が博士(社会心理学)の学位を授与するにふさわしい水準に達していると判断する。